

「ひと切れのケーキ」

木村圭一

登場人物

白石 灯	(21)	洋菓子店「パティスリー高橋」アルバイト
高橋 健治	(30)	洋菓子店「パティスリー高橋」店長
坂井 俊朗	(35)	「パティスリー高橋」の常連客
木下 祥子	(34)	坂井俊朗の元妻
木下 美希	(7)	俊朗と祥子の娘

○商店街

人通りの少ない商店街。

商店街の一角にある小さな洋菓子店。

「パティスリー高橋」と書かれた店名は薄汚れている。

○洋菓子店「パティスリー高橋」

こぢんまりとした店内。

ケースの中には美味しそうなショートケーキやシュークリームが綺麗に並べられている。

やたらと見た目がかわいい、子どもが喜びそうなケーキも並んである。

壁には、ケーキを宣伝する冴えないクマのキャラクターが描かれたポスターが貼ってある。

店内にはお客さんは誰もいない。

アルバイトの白石灯（21）は、レジ前に立っている。

人のいない店内を見るのに飽き、店

の外に視線を移す。

通行人が店の前を通り過ぎていく。

灯「今日も平和だな」

力の抜けたぼーっとした表情の灯。

思いついたようにケース内のケーキを

トングで見栄えよく整列させる。

店内奥の厨房から高橋健治（30）が
現れる。

灯「店長、お疲れ様です」

高橋「どう、新商品の売れ行きは好調？」

高橋、笑顔で灯に話しかける。

灯「そこまでだと思いますけど、今日もお客

さんの数は少ないですし。イチゴのショウ

トケーキとシュークリームはいくつか売れ

てますけど」

高橋「今日もじゃなくて、今日はだろ」

ケースを見る高橋。

どのケーキが売れているか確認する。

高橋「えっ！全然売れてないな、ほうれん草
のパウンドケーキ」

やたらと緑色の濃いケーキ。

「自信の新作登場！」と赤い字のポップが無駄に目立っている。

高橋の表情が少し暗くなる。

高橋「やっぱ緑色のケーキって美味しそうじゃないのかな？」

灯「ほうれん草が入っているから人気出ないんじゃないですか？ほうれん草って苦そうなイメージですし」

高橋「そんなことないだろ？珍しいから売れると思ったんだけどな」

灯「ショートケーキとか定番商品ほど人気出なさそうですね」

高橋「食べたなら美味しいのに」

落ち込む高橋。

高橋「なんかこう、もっと人気商品を作りたいんだよな。行列ができるぐらいのケーキ。それで、テレビにも紹介されて、爆発的な大人気になって」

体の前で握りこぶしを作って熱く話す

高橋。

灯「：そうですね」

素っ気ない返事の灯。

高橋「今は1店舗しかないこの店を人気店にして、2店舗、3店舗と増やしてゆくゆくは日本中にケーキを、美味しいケーキを届けられる店にしたい」

灯「でも人気店にするってけっこう難しいですよね」

高橋「なんでそんな後ろ向きなんだよ。俺だっていろいろ考えてるんだからな」

灯「そうかも知れないですけど」

高橋「あれ見てみるよ」

壁に貼られたポスターを指差す。

高橋「あのポスターのクマだってかわいいだろ」

ポスターに描かれたクマのキャラクター。。

かわいいのかどうかよく分からない。クマのキャラクターがケーキの写真よ

りも目立っている。

灯「かわいい：ですね」

高橋「そうだろ」

灯「あのキャラクターって店長がデザインしたんですよね？」

高橋「そう。子どもウケを狙ってな。子どもに人気出そうだろ？」

灯「いやー」

言い淀む灯。

灯「あのキャラクターって話題になってるんですか？」

高橋「いや：今のところはなっていない」

灯「今のところは」

高橋「そう、今のところは。でもな、こうやってひとつひとつ、できることからやってみるんだ」

灯「キャラクターとか見せ方も大事だと思うんですけど、一番大事なのって：」

高橋「ん？」

灯「：味じゃないですか？」

高橋「…味」

灯「はい」

高橋「そんなことはな、もちろん分かっている。分かってるんだけど、そう簡単に美味しくは作れないんだよな」

渋い表情の高橋。

高橋、ケースの中のケーキを眺めてため息をつく。

○洋菓店内（夕方）

珍しくお客さんがいる店内。

客たちは、ケースの中を覗き込む。

ケースの中のケーキは少ない。

灯「お決まりになりましたら、お声がけください」

客「すみません、このショートケーキひとつと…」

ケーキを指差しながら欲しい商品を注文する客。

ケースからケーキを取り出し箱詰めす

る灯。

てきばきとレジを打つ。

灯「イチゴのショートケーキひとつ、ガトー

ショコラひとつ、フルーツタルトひとつで

合計二千五百円です」

お金を受け取り、お釣りを渡す灯。

灯「保冷剤はお付けしますか？」

客「なくて大丈夫です」

ケーキの箱を渡す灯。

笑顔で帰っていく客。

灯「ありがとうございました」

ひと息つき、ケースを覗き込む。

ケーキは残り少ない。

灯「売れる時は、売れるんだよな」

店の扉が開く。

店内にスーツ姿の坂井俊朗（35）が

入ってくる。

疲れているのか、俯き気味の坂井。

暗い表情でケースを見る。

坂井「あの、ショートケーキとフルーツタル

トください」

灯「かしこまりました」

ケーキを箱詰めする灯。

灯「ショートケーキとフルーツタルトで千六百円です」

お金を受け取り、お釣りを渡す。

灯「保冷剤はお付けしますか？」

坂井「えーひとつお願いします」

ケーキ箱を暗い表情で受け取る坂井。

灯「ありがとうございました」

坂井の背中を怪訝そうに見送る灯。

○洋菓店内

客がいない店内。

ケースの窓ガラスを拭いている灯。

店の奥から高橋が現れる。

灯の目の前に立つ。

高橋「作戦を考えた」

灯「はい？作戦？」

高橋「ヒット商品を生み出すために協力して

欲しい」

灯 「はい：できることなら」

高橋 「これだ」

アンケート用紙を目の前に掲げる。

高橋 「お客さまアンケートだ」

灯 「アンケートですか？」

高橋 「そうだ」

アンケート用紙を受け取って見る灯。

灯 「ものすごいアイデアみたいに言わない

てくださいよ」

高橋 「このアンケートで、どのケーキが美味

しいと思うか、どんなケーキが食べたいの

かが分かる。そのアンケートを元にしてお

客さんのニーズに応える」

灯 「ニーズ」

高橋 「少しは参考になるかもしれぬ」

灯 「それは、そうですね」

アンケートをぼんやり見る灯。

灯 「店長この前、自分が作りたいものを作る

んだ、とか言ってますでした？」

高橋「確かにそんなことを言っていた時もあった。でも、もしかしたら俺が作るケーキって独創的すぎて、まわりがついて来れないだけかもしれない」

灯「はあ」

高橋「だから、お客さんの意見を取り入れるのも悪くないかなって」

灯「：そうですか」

ぽかんとしている灯。

○洋菓店内（夕方）

客にケーキ箱を渡す灯。

同時に、記入してもらったアンケートを受け取る。

灯「ありがとうございます」

帰っていく客。

記入済みのアンケートをまとめる灯。

何枚かペラペラとめくる。

厨房から現れる高橋。

高橋「どう？お客さんのアンケート。けっこ

う集まった？」

灯「はい、順調です」

高橋「何て書いてある？」

灯、描いてくれたアンケートをいくつかめくって見る。

灯「…そうですね」

書いてある文章をそのまま読み上げる。

灯「想像通りの味」

高橋「想像通り？」

灯「ちょうどいいサイズ」

高橋「サイズ」

灯「手頃な価格でいい」

高橋「価格」

灯「えーと、他には…」

高橋「もつとさ、このケーキが美味しいみたいな感想については書かれてないの？」

灯「…そうですね」

灯、アンケートをペラペラとめくる。

灯「ありました。ショートケーキの上の乗っているイチゴが美味しい」

高橋「それイチゴの感想じゃん。ケーキの感想じゃないじゃん」

灯「あっ」

高橋「なになに！何か良いこと書いてあった？」

灯「美味しい、普通、美味しくない、の3つのチェック項目だと、圧倒的に“普通”が多いですね」

高橋「普通ってなんだよ」

灯「このアンケート、店長が作ったんじゃないですか？」

高橋「普通ってというのが一番困るんだよな」

灯「美味しくないより良いじゃないですか？」

高橋「そうだけどさ。美味しくないの意味がないじゃん」

灯「そうですけど…」

高橋「なんだよ、みんな好き勝手書いて」

灯「それがアンケートですからね」

高橋「くそ」

納得いつてない表情の高橋。

高橋「うちに何回も来てくれる常連客なら、
まだしもたまにしか買わないやつに」

灯「そんなこと言っていると、お客さん減り
ますよ」

高橋「いやそもそも、何回も来てくれるお客
さんなんて少ないか？。誕生日とか記念日
とかそういう日に買う人が多いしな」

灯「リピーターですか？」

何かを思い出しながら呟く灯。

高橋「どうかしたか？」

灯「あっ、いました。毎週来てくれるお客さ
ん」

高橋「本当！」

灯「いるんですよ。スーツ着てるから多分サ
ラリーマンだと思うんですけど、毎週同じ
曜日に来てくれる男性がいるんですよ」

高橋「サラリーマンってことは男性か。甘党
男子って言葉もあるくらいだからな。男の
意見を聞くのも悪くないかもな」

灯「でも、ケーキ買う時全然楽しそうじゃな

んですよね。ケーキ買う時って、大抵の人は笑顔で買っていくのに」

高橋「きつと、あんまり楽しそうに買うと恥ずかしいからだろ。男は見た目に関係なく甘いもの好きな人も多いからな。きつとこの店の隠れファンだな」

灯「なんで隠れる必要があるんですか」

高橋「じゃあ、その隠れファンにも聞いてみてよ」

灯「あつ、わかりました」

○洋菓店内（夕）

店の扉が開く。

疲れた様子の坂井が現れる。

灯「あっ」

と、小さく呟く。

いつものようにケーキを見る坂井。

坂井「すいません、ショートケーキとシュークリームください」

灯「かしこまりました」

慣れた手つきでケーキを箱に詰める。

坂井にケーキ箱を手渡す灯。

受け取る坂井。

灯「あの、もし可能でしたらアンケートにご協力いただきたいんですが」

アンケート用紙を坂井の目の前に差し出す灯。

灯「皆さんに聞いてまして、この店のケーキの味って口に合うのかなっていうアンケートです」

怪訝そうな坂井の表情。

坂井「味？」

灯「はい。食べた感想が聞ければなって」

手にもったケーキ箱を不思議そうに見つめる坂井。

坂井「すいません、私これ食べたことなくて」

灯「えっ？あつ、そうなんですネ」

言葉に詰まる灯。

灯「プレゼント用ですか？食べられてる方の感想でも」

何て答えるか悩む坂井。

坂井「すいません。それも分かりません」

灯「えっ？」

店内を出ていく坂井。

灯「あ、ありがとうございました」

不思議そうに坂井を見送る灯。

○洋菓店内（夜）

閉店後の店内。

アンケートをペラペラとめくっている

見る高橋。

高橋「あーあ」

アンケートを見るのをやめる高橋。

淡々と店内の片付けをする灯。

高橋「アンケート作戦、今ひとつ収穫なかつ

たな」

灯「…そうですね」

天井を仰ぐ高橋。

高橋「フッ」

と突然笑う高橋。

灯「えっ！どうしたんですか？」

高橋「俺はこう見えて、ちゃんと考えてる」

灯「あっ、やっぱりこれからは味に：」

灯の言葉を遮り、

高橋「実はな、次の作戦は用意してある」

自信ありげな高橋。

灯「次の作戦？」

高橋「店の奥に大きいダンボールが届いていたの見ただろ」

灯「あー何かありましたね。あれ何なんですか？」

高橋「特別に最初に見せてあげよう。期待しててくれ」

灯「本当に期待して良いんですか？」

店の奥に消える高橋。

灯、不安そうな表情。

× × ×

高橋「見てくれよ、これ」

高橋、等身大のクマの着ぐるみを抱え

て現れる。

灯「えっ！？」

灯、啞然としている。

ポスターに描かれたクマのキャラクター
ーがそのまま実物になっている。

灯「なんですか、これ！？」

高橋「クマの着ぐるみ」

灯「着ぐるみ！？」

遊園地で見るとようなモコモコの着ぐる
み。

高橋がデザインしたキャラクターその
ままのため顔がかわいいとは言えない。

高橋「どうだ、驚いだだろ！」

クマの着ぐるみを床に座らせる。

高橋「着ぐるみを着て、この店を宣伝する。

つまり広告塔だ」

灯「……」

高橋「これでこの店の知名度もグンと、グン
とアップできだろ」

高橋、無駄に大きな身振り手振りで話

す。

灯「……」

高橋「効果ありそうだろ？」

灯「いや〜」

何と続けて良いか分からない。

灯「これは、誰が着るんですか？」

高橋「えっ？」

灯「えって何ですか？」

高橋「まだ決めてない。どうしようかな〜」

灯「今から考えるんですか？」

しばらく、灯を見つめる高橋。

高橋「着る？」

灯「えっ!？」

着るかどうか考えるふりをする灯。

灯「私がこれに入ったらレジはどうするんで

すか？」

高橋「レジ担当じゃない日に」

灯「これ以上シフト増やせないですよ」

高橋「そうか〜でもこれ着てもらうために人

増やせないもんな」

灯 「宣伝より：味をなんとかした方がいいよ
うに思うんですけど：」

高橋 「よし、何か策を考える」

灯 「大丈夫ですか？」

ぼそりと呟く灯。

○商店街（夕）

商店街をとぼとぼと歩く灯。

スーパーで買った食材が入った袋を手
に持っている。

ふと、どこか見覚えのあるサラリーマ
ンが向こうから歩いてくる。

常連客の坂井だと気がつく灯。

手にはパティスリー高橋で買ったケー
キ箱を持っている。

坂井は、灯に気づくことなく歩いてい
く。

迷った表情の後、坂井の後を尾行する
灯。

○道路（夕）

商店街を抜け、公園近くの道を歩く坂井。

気づかれないよう、数メートル後ろを歩く灯。

坂井が進む先に、腕組みをしている女性がひとり立っている。

坂井が立ち止まりその女性に声をかける。

坂井「祥子」

木下祥子（34）が坂井に気づく。

腕時計を見てやたら時間を気にしている様子。

祥子「遅いわよ」

灯、木陰に隠れる。

坂井と祥子に気づかれないよう少し離れたところから見ている。

2人の会話がかろうじて聞こえる。

坂井「どこかカフェでも入らないか？」

祥子「そんな時間ないわよ」

素っ気ない態度の様子。

坂井「そうか」

祥子「話って？」

坂井「話っていうか美希のことで」

祥子「…」

坂井「美希は元気か？」

祥子「いつも通りよ」

坂井「そう」

祥子「…」

坂井「…美希に会えないかなって？」

祥子「仕方ないでしょ。美希が会いたくない

って言ってるんだから」

坂井「本当にそう言ってるのか？」

坂井、祥子の口調が少しずつ荒くなっ

ていく。

祥子「私が嘘ついてるっていうの？」

坂井「そうは言っていないだろ」

祥子「結婚して時は、美希のことなんか気に

も止めなかつたくせに」

少し声を荒げる祥子。

坂井「仕方ないだろ、仕事が忙しかったんだから」

祥子「また、仕事のせいにして」

灯、上手く聞き取れずに2人に近づく。

坂井「そうか：わかった。これ美希に渡してくれ。ケーキが入ってる」

祥子の前にケーキ箱を差し出す。

祥子「また？」

渋々受け取る祥子。

祥子「それじゃあ」

足早に歩いていく祥子。

祥子の背中を見送る坂井。

隠れるのをやめ、坂井を見る灯。

振り返る坂井。

灯と目が合う。

坂井「なにか？」

灯「えっと：いや、あの。保冷剤はお付けし

ますか？」

坂井「はい？」

○公園（夜）

静かな夜の公園。

ベンチに座る坂井。

ベンチの前に立つ灯。

灯「すみません。あの：盗み聞きする気はな

かったんです。たまたま：」

坂井「変なところ見られちゃったな」

苦笑いする坂井。

灯「すみません」

と頭を下げてあやまる灯。

坂井「さっき話をしてたのは妻。あーいや、

この前離婚したから元妻」

灯「……」

坂井「娘がいるんですよ。6歳になる娘が1

人離婚してからは、娘に会えてなくて」

落ち着いた声で話す坂井。

坂井「娘に会わせてくれって頼んでるんです

けど、元妻からは、もう娘には会わないで

くれって言われてるんです」

灯「……」

灯、何と答えていいかわからず無言の

まま。

坂井「離婚の原因は自分なんですけどね」

坂井、また苦笑い。

坂井「だからこうやって、会えないか頼んでるんですよ。ケーキを持って」

灯「そうだったんですね、それで」

坂井「渡しているケーキも娘に食べてもらえてるかどうかも：もしかしたら捨てられてるかもしれません」

言い淀む坂井。

坂井「あつ、なんかすいません。せつかく買ったものを：」

灯「いえ、そんな：」

坂井「それでも、娘に喜んでくれそうなものを選んでいるつもりです」

灯「うちのケーキは：美味しいですから」

坂井「喜んでもらえそうなものって言っておきながら、自分はそのケーキを一度も食べたこともなかった」

坂井、深いため息をつく。

坂井「あの時、ケーキの感想聞かれた時には
じめて気づきました。自分はこのケーキを
食べたことがないんだって」

灯「……」

坂井「近くにあるのに、知ったつもりになっ
ていた、分かって気になっていた…：そうい
うところなんですかね。妻に愛想つかされ
たのも」

灯「……」

坂井「あっこんな話されても困りますよね」

灯「いえっそんな…：夫婦の関係とか家族の
ことは私にはよくわかりません」

緊張した声で応える灯。

灯「ただ、うちの店のケーキ、美味しいので、
いや、味は普通っていう人も多いですけど
楽しく食べて欲しいなって…：いう…：それだ
けです」

少しだけ笑う坂井。

○洋菓子店

いつものと変わらない店内。

ケーキをトングで並べる灯。

扉が開き、店内に客が入ってくる。

灯「いらっしやいませ」

その客が坂井だと気づく灯。

灯「あっ」

坂井「どうも」

灯「あっ、いえ」

頭を下げる灯。

灯「この前はすみません」

坂井「こつちも変なところを見せてしまっ」

灯「いえ……」

おかしな間ができる。

灯「お決まりになりましたら、お声がけくだ

さい」

坂井「あの、この店ってバースデーケーキの

注文って可能ですか？」

灯「えっ」

坂井「今度の週末、娘の誕生日なんです。

どうしてもケーキプレゼントしたくて」

灯「あっはい、承ってます」

灯は、ホールケーキの写真が並んだプ

レートを見せる。

灯「この中から、好きなケーキを選んでください。オーダーメイドもできます」

プレートを見る坂井。

坂井「あの、オーダーメイドって、ショートケーキにもできますか？」

灯「ショートケーキですか？」

坂井「できればホールケーキじゃなくてショートケーキにしたいんです」

灯「はい、ショートケーキでも可能です」

坂井「ここで言うのも変ですけど、食べてもらえるかどうかわかりません」

灯「…そうですか」

坂井「元妻に渡して、本当に娘に渡してもらえるかどうかも」

灯「…」

坂井「だから大きいケーキよりか、小さいケ

「キの方が邪魔にならないかなって」

灯「あの…直接娘さんにケーキを渡すのは
できないんですか？」

坂井「…」

灯「いやっ、あの、すいません。また余計な
こと」

坂井「いえ、いいんです」

灯「…」

坂井「今さら、父親っぽいことしようって
うのがわがままなんです。それは分かって
いるんです。それに娘に勝手に会ったら、

元妻との関係が余計に悪くなります」

灯「そうですか…でもケーキを渡すぐらい」

ホールケーキのプレートを見る坂井。

坂井「これ、美味しそうだな」

灯「直接…直接会わなければいいんですよ
ね」

坂井「えっ」

灯「私の思いつきなんですけど…」

灯、店の隅を見る。

視線の先には、等身大のクマの着ぐる
みが置かれている。

○洋菓子店

いつもと変わらない店内。

灯「店長、この着ぐるみ貸してくれませんか？」

高橋「えっ！貸すもの何もみんなの物じゃん」

灯「今度の土曜日。今度の土曜日にこれ使いたいんです」

高橋「今度の土曜日ってシフト入ってたっけ？」

灯「いや：シフトは入ってないんですけど、この店を宣伝してきます」

高橋「本当に？」
灯「まずこの店を人気店にして、2店舗目もできるように頑張らしましょう」

高橋「そうだな。まさかそんなにこの店のことを考えてくれてるなんて。いいよどんなん
どん宣伝してよ」

灯「ありがとうございます」

○公園

ベンチに座る高橋。

クマのぬいぐるみを抱えて立つ灯。

高橋の膝の上にはケーキ箱。

ケーキ箱を開ける坂井。

小さなショートケーキがポツンと入っている。

上にイチゴがひとつだけ乗った飾りのないケーキ。

灯「本当にこんな小さいケーキで良かったんですか？もつと：」

坂井「これで良いんです。美希の：娘の誕生日をお祝いできさえすれば」

そつと頷く灯。

坂井「：ほんの少しだけでも、娘の人生に関われたら」

灯「：はい」

坂井「でも、まだ迷っています。こんな事し

て良いのか？」

灯「坂井さんじゃなく、クマがケーキを渡すだけです。クマになりきりましょう」

クマの頭の部分をかかげる灯。

坂井「そうですね：クマとして：」

坂井、ためらいの表情。

× × ×

着ぐるみの胴体部分を着る坂井。

坂井、動きを確認するためのそのそと歩いてみる。

灯「ぴったりですね」

坂井「そうですね、ちよつと動きづらいですけど」

いろいろと動いてみる。

灯「少しでも、着ぐるみを着た状態での動きに慣れておいた方がいいと思います」

坂井「そうですね」

緊張した表情の坂井。

灯と坂井、2人並んで公園の外へと歩

いていく。

○マンション付近

木下祥子が住むマンション近くの灯と

坂井。

人から隠れるようにして立っている。

坂井「このマンションです」

緊張した声の坂井。

灯「今日って娘さんは一人なんですか？」

坂井「この時間帯なら一人で留守番している

はずです」

灯「そうなんです、よく知ってますね」

坂井「良くないって分かってはいたんですけど、この日のために、コソコソと調べたんです」

灯「……」

坂井「でも、娘が一人でいたとしても、家の中に入れるどうかまでは：知らない人が家に来ても入れないようになって言われてるでしょうし」

灯「……」

灯「そうですよね」

坂井「その時はその時で考えます」

坂井、クマの着ぐるみの頭の部分を被る。

灯、スケッチブックを坂井の手に持たせる。

灯「頑張ってください」

頷くクマの姿の坂井。

マンションを方向を見る。

灯、ポんとクマの着ぐるみの背中を叩く。

○マンション

マンションの廊下をゆっくりとクマの着ぐるみが進む。

前がちゃんと見えないのか坂井の動きはぎこちない。

部屋番号を確認しながら進む。

様子と美希が住む部屋の前に到着する。チャイムを押そうと手を伸ばす坂井。

坂井の動きが止まる。

一度手を下ろす。

ためらった後、チャイムを鳴らす。

○マンション付近

マンションの上の階を見上げる灯。

不安そうな表情。

○マンションの一室

坂井は廊下に立ち尽くす。

扉が開く様子はない。

ゆっくりとドアが開く。

美希（7）が出てくる。

美希「はーい」

とかわいい声。

目の前にクマが現れ驚いた様子の美希。

思わず後ずさりする。

美希「クマさん…」

怖がらせまいと手を振っておどけて見せる坂井。

どうしていいか分からない美希。
心細そうにしている。

坂井はしゃがんで、美希と同じ目線の
高さになる。

坂井、美希の目の前に、スケッチブツ
クをかかげる。

ぎこちなくスケッチブックをめくる坂
井。

スケッチブックには

「おとどけものです」

とかわいい文字で書かれている。

何も言わずに立ったままの美希。

坂井、スケッチブックをめくる。

「みき ハッピーバースデー」

と、カラフルな文字で書かれている。

坂井は、一切声を出さない。

美希もまた、何も言わない。

またゆっくりとスケッチブックのペー
ジをめくる。

「7さいになったね」

スケッチブックをめくる音だけがする。
またページをめくる。

「クマさんはどんなときでも みまっ
ているよ」

と書かれている。

どことなく嬉しそうな美希の表情。

また、静かにページをめくる。

「たんじょうびプレゼントをおくるね」

美希の前にケーキ箱を入れた袋を差し
出す。

美希は受け取るかどうか迷っている。

ゆっくりと近づき、袋を受け取る美希。
手を引っ込める坂井。

○マンション付近

マンションの前で不安そうな表情で立
ち竦む灯。

遠くからマンションに女性が近づいて
来るのに気づく。

よく見ると坂井の元妻の様子。

灯「えっ！？」

あたふたする灯。

思わずマンションを見上げるも誰もい

ない。

灯「まずい！」

徐々に祥子との距離が縮まる。

灯、思わず祥子の方向に向かい歩き始

める。

すれ違う一歩手前で、財布を落とす灯。

明らかに財布が落ちた音がする。

聞こえないふりをしてそのまま歩き続

ける灯。

祥子、落とした財布を拾い上げる。

祥子「あのっ、落としましたよ、財布」

不自然に振り返る灯。

灯「えっ？あっ、いつの間に！」

そそくさと財布を受け取る灯。

灯「あ、ありがとうございます」

その場を立ち去ろうとする祥子。

灯「あのっ」

祥子「何か？」

灯「どこかで会ったことありませんか？」

祥子「？」

灯「気のせいかな、なんて」

祥子「気のせいだと思いますよ」

灯「そうですよね：」

祥子の向こう側に、クマの着ぐるみが
マンションから出てくるのを見つける。

祥子もその歩いてくるクマに気づく。

呆然とクマを見つめる祥子。

緊張の面持ちの灯。

ゆっくりとぎこちない動きのクマが2
人の横を通り過ぎる。

通り過ぎた後も、クマの背中を見つめ
る祥子。

祥子、クマと灯を交互に見る。

祥子「ふーん」

灯の顔をまじまじと見つめる祥子。

灯「ありがとうございます。それでは」

その場を立ち去ろうとする灯。

祥子「ねえ」

灯「はい？」

祥子「あの人に言っておいて」

灯「あの人？」

祥子「あー、坂井に言っておいて。コソコソするなって」

灯「えっ？」

灯、驚いた表情。

灯「何のことですか？」

呆れた表情の祥子。

祥子「動きを見ただけで分かるわよ。何年一緒にいたと思ってるのよ」

そう言うと、灯の返事を待たずに、マシヨンに向かって歩いていく。

祥子の背中を見つめる灯。

灯「えっ？普通わかる？」

しばらく立ち尽くす。

ふと我に返り、坂井を追いかける灯。

○商店街

商店街を俯き気味に歩くクマの着ぐるみを着たままの坂井。
道ゆく人がちらちらと見ている。
喫茶店を見つけて立ち止まる。

○喫茶店

喫茶店の扉が開く。
店内にクマの着ぐるみを着た坂井が入る。

クマを見た店員がギョツとしている。

店員「いつ、一名様ですか？」

頷く坂井。

店員「こちらへどうぞ！」

店員が席に案内する。

案内された席に座る坂井。

店員「メニューお決まりになりましたら…」

クマの手でメニューのコーヒーを指さす坂井。

店員「ホットコーヒー1つですか？」
頷く坂井。

○商店街

辺りを見回しながら商店街を歩く灯。

灯「どこ行った？」

喫茶店の前で立ち止まる。

ふと、喫茶店の窓から店内を覗くと、

クマを見つける。

灯「あっ！」

急いで喫茶店に入る灯。

○喫茶店

店内に入る灯。

灯「待ち合わせです」

と店員に言い、坂井の向かい側に座る灯。

灯「坂井さん」

坂井は一瞬顔を上げて、俯く。

坂井は何も言わない。

灯「うまくいきましたか？」

また、少しだけ顔を上げる坂井。

顔を上げたまま動かない坂井。

灯「なんかすいません、私やっぱり余計なこ

と」

ゆっくりと首を横に振る坂井。

灯「娘さんには、会えたんですか？」

首を縦に振る坂井。

灯「ケーキは：渡せたんですか？」

首を縦に振る坂井。

灯「良かった」

少しホツとした表情の灯。

灯「でも、食べてもらえたかまでは：分から

ないですよね」

首を縦に振る坂井。

しばらく沈黙。

灯「すいません、なんか私のわがままで。わたし、いつもと変わらず、ただケーキを売ってるだけで、いつも同じことしかやっ
てないなって思って、なんか虚しいなって。
ときどき、わたしじゃなくてもできること
なんだろうなって思うときがあつて。それ
で、少しでも大きなことがしたいな：みた
いなとか、思ったりして：」

首を横に振る坂井。

灯の表情が少しだけやわらぐ。

○洋菓子店

いつもの客のいない店内。

どこかやる気のない灯。

ポーツと店の外を眺めている。

店内には、クマのキャラクターの頭だ

けが隅にポツンと置かれている。

店の奥から高橋が出てくる。

ケースを眺める。

高橋「今日は結構売れてるんじゃない？」

嬉しそうにしている高橋。

灯「クマの着ぐるみ作戦はどうしたんですか

？」

クマの頭を見ながら言う。

高橋「いや、それなんだけさ」

そう言いながら、高橋もクマの頭を見る。

高橋「なんか、こう：イメージと違った」

灯「違った？」

高橋「みんながワーって近づいてくれると思
ったんだけど、誰も近寄ろうとしないんだ
よな」

がっかりしている高橋。

高橋「なんでだろうな？」

灯「なんでっていうか、かわいくないから：
じゃないですか？」

高橋「そうかなあ？」

灯「そうじゃないんですか」

適当に答える灯。

灯「着ぐるみ作戦はもうやらないんですか？」

高橋「もうやめる」

きっぱりと答える高橋。

高橋「だから、早く売れる商品作って人気店
にしたいよな」

灯「：そうですね」

高橋「大きい店を構えてさ」

灯「でも：そんな大きい店にできなくても、
いいんじゃないですか？」

高橋「えっ？いいわけないだろ」

灯「人気店になってもならなくたって、きつとこの店のケーキ食べて美味しいって言うてくれる人はいますよ」

高橋「……」

灯「ほんの少しだけ喜んでもらえて、ほんの少しだけ笑顔にできて、ほんの少しだけ誰かの背中を押せたら……」

高橋「……」

灯「大きいことじゃなくても、ほんの少しで……」

高橋「そう言われたら、それも悪くないなって思っちゃうんだよな」

灯「しっかりしてくださいよ」

高橋「これからは、もっと見ためにこだわって、派手な、でっかいホールケーキとかが良いかもな」

灯「カットされたケーキでもいいじゃないですか？」

高橋「えっ」

灯 「ショートケーキにはショートケーキの良
さがありますよ？」

高橋 「何だよ、ショートケーキの良さって」

灯 「ショートケーキって、ホールケーキを切
ってるわけじゃないですか？」

高橋 「うん」

灯 「もともと一個の大きなケーキをみんなで
分け合って食べる。ってことは同じケーキ
だったものを食べてる人がどこかにいる。
どんな人が食べてるんだろうって思ったこ
とありませんか？」

高橋 「うーん、思ったことない」

灯 「同じケーキを食べてる人も笑顔で食べて
たらいいな〜みたいなの」

高橋は考える表情。

灯 「そう思ったら楽しい気分になりません
か？笑顔を共有してるみたいで」

高橋 「そう思ったことはなかったが、そう考
えると楽しいかも知れない」

灯 「そうですよね！」

高橋「新作を作る上で、何かヒントになるか
もしれない」

灯「本当ですか」

高橋「ただな、もっと大事なことがある」

灯「なんですか？」

高橋「ケーキみたいに人生は甘くないからな」

灯「いやゝまあ、そうかもしれないですけど。

なんで今それを言うんですか？」

高橋「覚えておけよ」

灯「店長に言われると、大事なことのように

聞こえないですよね」

高橋「なんでだよ。めちやくちや大事なこと

だからな」

灯「分かりました、覚えておきます」

高橋「それじゃあ、新作ケーキでも考えるか
ら。レジ頼んだ」

厨房に戻っていく高橋。

○洋菓子店（夕）

店内に客が入ってくる。

灯「いらっしやいませ」

よく見ると坂井だった。

灯「あっ」

坂井「この前はどうも」

灯「どうも」

坂井「あっ」

クマのぬいぐるみをチラッと見る坂井。

灯「あっクマの着ぐるみは、もう使わないみ

たいです。誰も近寄らないからって」

坂井「そうなんです。このクマのキャラク

ター、自分は結構好きなんですけど」

灯「えっ、そうなんですか？ けっこう不評ら

しいですよ」

坂井「なんか愛嬌があって良いなって」

灯「なんか人によるんですね」

坂井「そういえば、娘も近づいて来なかった

な」

灯「それは多分、急に目の前にクマが現れた

からじゃないですか」

坂井「それもそうですね」

笑う坂井。

灯「あの時、喫茶店では何も言ってくれなかったじゃないですか？」

坂井「いや、あれは：泣き顔見られたくなくて」

灯「え」

坂井「久しぶりに娘を見られて、嬉しくなつて。前見た時よりも大きくなってて、成長しなつて」

嬉しそうな坂井。

坂井「着ぐるみ被ってるから涙も拭けなくて」

灯「……」

坂井「この前、元妻に会ったんですけど。その時に言われたんですよ。コソコソするな
って」

灯「あー」

坂井「なんか、バレてたみたいですよ。全部お見通しだみたいな顔されました」

灯「：そうなんですネ」

坂井「それで怒られちゃいました」

苦笑いをする坂井。

灯も苦笑い。

坂井「あんなことまでしてもらったのに」

灯「いえ、そんな私も……」

頭を下げる灯。

灯「娘さんには、これからも会えないんですか？」

坂井「それは、分かりません」

灯「……」

坂井「時間はかかるかもしれないんですけど、話し合うつもりです」

灯「はい」

坂井「それで、今日は娘にじゃなくて自分も食べてみようと思って」

灯「本当ですか！」

坂井「普段ケーキなんて滅多に食べないんですけど」

ケースの中のケーキを眺める坂井。

坂井「おすすめのケーキありますか？」

灯「はい、当店のおすすめは……」

元気よく答える灯。

タイトル『ひと切れのケーキ』